

# 沖縄の自治会と自衛隊基地（6）

——沖縄地域調査における概念問題に焦点を当てて——

梶山女学園大学 田村雅夫

## 1 目的

報告者は年来、社会調査を遂行するにあたって、ある概念上の問題にこだわってきたが、近年の沖縄地域での共同調査研究に参加する過程でこの問題を整理する必要性を強く感じてきている。それは社会的現実に対する調査研究においてそこで我々が用いる、あるいは出会う概念の性格についてどの程度に認識上の反省をおこなっておくべきかという問題である。本報告では現在われわれが遂行している沖縄地域調査における経験を素材としてこの問題についての検討を行うことによって、こうした概念上の整理がこの沖縄地域社会調査研究において、さらには経験科学の立場からの社会調査研究において、意義のある極めて重要な作業であることを、具体的な事例として示すことを目指す。

## 2 方法

まず経験科学における概念についての基礎的な確認を科学方法論上の議論、とくにマックス・ウェーバーの理念型をめぐる議論に焦点を当てて行い、そこから報告者が準拠する社会現象についての調査研究における概念的構成の基本的枠組みを明らかにする。次に我々が沖縄地域調査で直面した概念上の問題（具体的には「字」や「地区」や「自治会」など）を取り上げて、それをこの枠組みを用いて整理し、こうした作業が研究営為にどのような貢献をもたらすのかを、南城市字つきしろを事例に取り上げて検討する。

## 3 結果

マックス・ウェーバーの科学方法論は認識上の2元論の立場から経験科学における概念の有り様を探究したものでありそのエッセンスが理念型概念である。認識主体と認識客体、主観的主体と客観的客体という原理の異なる世界を架橋することを目指す営みが経験科学であるが、そのための合理的な戦略的手段が理念型概念であった。それは歴史的現実、あるいはそのエッセンスとしての客観的世界に可能な限り肉薄するための、論理的一貫性という認識主体の合理性を徹底的に動員することによって得られる合理的認識手段なのである。一方で、理念型を含む概念そのものはあくまでも認識主体の側の、主観的世界に属するものである。さらに客観的世界の社会的部分は認識主体の諸行為によって客体化されたものである。その過程においては認識主体の抱く概念が決定的な役割を果たしている。したがって社会的現実に対する調査研究は、理念型概念に代表されるような科学的概念の担い手としての研究主体と、研究対象としての社会的現実、そして社会的現実を客体化している主体としての行為主体、それによって客体化された歴史的現実、さらに行為主体によって客体化される可能性としての社会的現実という構造的枠組みにおいて営まれる。加えて、研究主体という存在もその実存の次元では社会的現実の一部であり、研究という営みもそうした社会的現実に関連しつつ遂行されているというメタ構造を認識するという相対的視点も、研究営為の実践的意義を認識する上では重要となる。

## 4 結論

調査研究における概念構成についてのこうした枠組みを、特に「自治会」のような研究主体と研究客体に属する被調査者が共有する概念を含む社会的現実の調査研究に際して分析上の枠組みとして意識的に用いる作業を行うことは、無用の混乱を回避し、分析上の明晰性を確保する上で重要である。またそれは、概念の実体化という社会的現実のダイナミクスの一様相も捉える上でも、研究主体と研究対象の関係を明確化する上でも有効な認識枠組みとなる。